

第 1 回国際シンポジウム「鼻副鼻腔の感染とアレルギー」

1st International Symposium on Infection and Allergy of the
Nose and Paranasal Sinuses (ISIAN)

会長 高橋 良
担当 東京慈恵会医科大学耳鼻咽喉科学教室
会期 1976 年 (昭和 51 年) 11 月 12 日から 14 日
会場 帝国ホテル (東京)

サテライト・シンポジウム

会長 熊沢 忠躬
担当 関西医科大学耳鼻咽喉科学教室
会期 1976 年 (昭和 51 年) 11 月 10 日
会場 京都国際会議場

国際シンポジウム「鼻副鼻腔の感染とアレルギー」International Symposium “Infection and Allergy of the Nose and Paranasal Sinuses”(ISIAN)は東京慈恵医大名誉教授高橋良会長の下、1976 年 11 月 12 日から 14 日までの 3 日間、東京の帝国ホテル富士の間を会場として開催された。今回のこの国際的な学術集会が＜学会＞でなく＜シンポジウム＞という名の下に当初から企画されたのは、世界耳鼻咽喉科学会議のように総括的で、十分な討論も行われないうちに Session が閉じられるような形式的な学会発表に終ることなく、鼻科学、とくに鼻副鼻腔の感染とアレルギーに焦点を絞って、現時点における問題点について心ゆくまで論議を尽くそうという高橋良会長の発想が基盤となっているからであろう。このようなシンポジウムの基本構想は開催の約 2 年前から高橋会長を中心に東京慈恵会医科大学耳鼻咽喉科学教室の関係者、日本鼻副鼻腔学会の運営医員の方々によって検討され、その後、慈恵医大関係者による ISIAN 事務局の設置、帝京大学石井哲夫助教授を Chairman とし、鼻科学の若手研究者で固めた Executive Committee の結成、さらに西ドイツの Naumann 教授を Chairman とする International Program Committee が作られて、着々と開催準備がすすめられていった。

1976 年春に出された ISIAN の役員への報告文書が今なお手元に残っているが、それによると「ISIAN 事務局運営委員会も毎週火曜日の午後 7 時から 10 時まで行われ、69 回を迎えました。その間紆余曲折し、ここに到りようやく Second Circular の発送を終了しました。」とあるから、おそらく開催までには 100 回をゆうに越える会議が開かれ、ことに外国への呼びかけやその反応をみての状況分析、シンポジウム開催にまつわる具体的な諸問題—ことにその基本となる財務、学術両面の詳細が順を追って検討されていったのであろう。事務局で直後、このように莫大なエネルギーを要する下準備にたずさわられた高橋会長—

門の方々や Executive Committee, Co-chairman,の努力には全く頭の下がる思いであった。

さて、このような周到な準備が重ねられた結果、あらかじめ募集された演題は外国から 39 題、国内から 38 題、計 77 題にも達し、とくに外国からの演題が半数以上を占めたことは、本シンポジウムの企画に対する海外の研究者のなみなみならぬ賛意が感じられたのであった。これらの演題はテーマ別に分類され、15 の Session と 1 つの Film Session が組まれたが、この他に高橋良名誉教授の会長講演、New York の Connel 博士および München の Naumann 教授の招待講演が用意され、それぞれの Session や講演の座長、副座長も 10 月初旬には決定された。こうして ISIAN はいよいよ 11 月 11 日夕方 5 時過ぎより、目黒の八芳園で会長レセプションによって幕が切って落とされた。シンポジウム開催期間中に登録参加した人数は 400 名を超えたことは、まずもって ISIAN の成功を物語るものであったが、八芳園新館のレセプション会場入口に立って羽織袴姿で婦人とともに来会者を迎えられた高橋会長の面持ちには、これから本番、という緊張感が漂う一方、このような盛会となったことへの満足感があふれ、笑みを絶やさなかったのが印象的であった。この会長レセプションは江戸情緒ゆたかな余興なども折り込んで、いかにも前夜祭的な華やいだ雰囲気のうちに進められた。

開会式は 11 月 12 日朝 9 時から会場の帝国ホテル富士の間で行われたが、陸上自衛隊吹奏楽団による“君が代”演奏に続いて、高橋会長の開会の辞、Naumann 教授、山本馨教授、Silcox 博士から祝辞や歓迎の辞が述べられた。そして、定刻 10 時 25 分からの Session 1 Nasopulmonary Relations をもってはいよいよ 3 日間の ISIAN がスタートを切った。各 Session は、従来の国内で行われている発表形式にあてはめれば、シンポジウムというよりは一般演題発表に近い形で行われたが、演説時間については外国人 12 分、日本人 10 分、討論時間は 1 題平均 3 分が与えられた。さらに、Topic Session としてとりあげられた Nasal Allergy-Basic 2, Nasal Allergy-Surgical Treatment の 3 群の演者には 1 題 5 分の討論時間、また、国際プログラム委員会のメンバーには 1 題 15 分の演説時間と 5 分の討論時間が許されていた。したがってお座なりの発表というのではなく、各群ともかなり余裕を持って floor と演者間、同一群の演者間、座長または副座長と演者間の討論が活発に行なわれ、かつ最後に座長がその群のまとめを述べるという形式をとられたので、内容的にはシンポジウムの名にふさわしい成果が得られたと思う。これらの時間配分はもちろん、外国からの来会者に敬意を払ったホストとしての謙譲を示したものであったが、一部には、スライドも十分用意せず、単なる臨床経験をまくしたてる外国人演者もみられ、果たしてかような演者に対する時間的優遇がよいのかどうか、疑問を抱かされる一面もあった。発表内容では、とくに基礎面における我が国のレベルは世界の最も高い水準にあるとの印象をあらためて強くしたが、デンマーク、スウェーデンなどスカンジナビア勢の活躍も注目に値した。とくにデンマークの Mygind 教授の一門は、討論についても事前に演題を十分に検討して、若い研究者が、分担して質問するなど、学会に対する真剣な取り組みの姿勢に共感させられるものがあった。なお、従来から発表論文が多いアメリカやドイツからの参加者

が少なかったのが残念であったが、アメリカの Connel 博士の”Histological Classification of Non-Infections and Non-Surgical Nasal Disease”や西ドイツの Naumann 教授の”The Nasal Mucosa and Its Resistance towards an Infection”と題する招待講演は総括的な内容ではあったが、それぞれアメリカ、西ドイツの鼻科学の水準の一端を示すものとして、興味深く聞いた。ことに Naumann 教授の講演は最近の免疫学の進歩にもとづく新しい知見をも交じえた明快な内容で、鼻粘膜の感染防御機構に関する考え方を整理するのに役立つものであった。高橋良名誉教授の会長講演”Environmental Factors in the development of Infection and Allergy of the Nose and Paranasal Sinuses”は、ライフワークとして積み重ねられてきた鼻科学に関する歴大な業績のうちから、とくに環境の変化がもたらす鼻副鼻腔疾患病態の時代的変遷についてとり上げ、鋭い科学的洞察を加えるとともに、人間が今後どのような生活環境を持つべきかという未来への重要な文明論的な課題を提起するものであった。これは、奇しくも、熱帯地方では真菌による肉芽腫など特異な感染症がまだ存在すること、他方日本など先進国では化膿型の慢性鼻副鼻腔炎が減少し、鼻アレルギーが増加しているなど、本シンポジウムでのさまざまな発表を一段と高いところから俯瞰したような内容であり、外国からの参加者にも深い感銘を与えたようであった。

今回は公用語として英語のみが採用されたが、演説では英語→日本語、討論では英語⇄日本語の同時通訳が行われたので、われわれ日本人にとっては大変好都合でほぼすべての演説および討論の内容を正確に理解することが出来た。この同時通訳者の方には、英語に堪能な若手研究者が配されて、内容などについての助言がなされていた模様で、このような細かい配慮が、より正しい通訳の助けを借りるまでもなく、堂々と英語で討論できる本邦研究者の増加には大変心強いものがあり、学問的水準は高いにもかかわらず、言語のハンディキャップを背負って来たわが国の耳鼻咽喉科学にもごく近い将来、名実ともに世界をリードする日の来ることが確信された次第であった。

ともかく、このシンポジウムを終わって、3日間、国内外を問わず常に席を空けることなく会場にとどまって、熱心に討論に参加した出席者がほとんど占めたことも特筆に値することで、やはりテーマを絞った今回の形式が賢明であったことがよく理解された。また、現時点における鼻副鼻腔の感染アレルギーに関する世界の研究と臨床の趨勢が浮彫りにされたことは何より確かなことであり、その中でわが国の鼻科学にたずさわる者の位置づけと任務の重さを認識し、さらに将来への展望を開くことができたことも誠に有意義であったと言わなければならない。

かつて、故高須照男教授が当大学在学中、当教室で国際鼻科学会の **Extraordinary Meeting** をお世話させていただいたことがあったが、これはアメリカでの外鼻および鼻中隔の **Corrective Surgery** を主導する Cottle 博士一門の限られたメンバーが中心となった真の意味の国際学会とは言い難いものであった。今回の国際シンポジウム ISIAN は **public** な性格をはじめから正しく推し進めた点で、すじの通ったものとなり、そのことが、各国代表をして、以後 4 年毎に引き続きこのシンポジウムを開催することを決定せしめた大きな

要因となったのであろう。閉幕に当って、今回を第1回とし、次回は Naumann 教授の主宰の下に München で開催されることが発表されたが、鼻科学を専攻するものにとってはまさに大きな贈り物のように感じられた。

ISIAN の学問的成果は近日発行される proceeding によって再確認されるであろうが、ともかく高橋良名誉教授の発案をかように結実させた高橋会長御本人をはじめ、東京慈恵医大耳鼻咽喉科学教室関係者、最初からこの企画に賛意を表し、実現の労を惜しまなかった日本耳鼻咽喉科学会、日本鼻副鼻腔学会、IFOS 関係者に深い敬意を払いたいと思う。なお、このシンポジウムに先立って京都国際会議場で行なわれたサテライト・シンポジウムには都合で参加できなかったが、熊沢忠躬教授とその門下の関西医大の方々のお骨折りで、スウェーデンの Ingelstedt 教授、京都府立医大水越教授、アメリカの Yanagisawa 博士、京大檜教授などの講演が行われ、大変有意義な会であったと聞く。不確定な要素が多かった中で、このような催しを快く引受けて実行された熊沢教授の御苦勞をもおねぎらいしてこのつたない印象記の筆をおきたい。

なお、本稿は耳展 20 (1) : 127~129、1977 に掲載された馬場駿吉の「ISIAN 印象記」の再録であることをお断りする。

〔 名古屋市立大学教授
馬 場 駿 吉 〕